

## 解答

一 a 負 b 放課後 c 郵送 d 提案

二 ユーモアとぬくもりの混在するちよつといひ話

三 ア

四 長崎さんの話を細部まで聞かず、想定していたイメージのとおりに書いた。

五 他愛なくもほほえましい事件として、読者に喜んでもらえるという自信。

六 ガメラがもらわれていったとき長崎さんは安心しただろうと思っていたのに、落ちこんでいたのだと知ったから。

七 1 亮くんが引っこしてから落ちこみ、亮くんのことを気にかけていたが、半年前に孤独死したこと。

2 学校でいじめにあっていたらしいが、長崎さんの家にガメラがいたあいだだけは、他の子供たちと仲良くやっていたということ。

八 エ

九 学校では弱気で友達をうまく作れなかったため、同じく一人ぼっちだったガメラに共感できたから。

十 ガメラがいたおかげで、亮くんが友達でできたことや、夫を亡くして一人だった自分のところに子供たちが集まり、夢のような楽しい思いができたことを感謝している。

十一 1 ガメラが新しい飼い主のもとで元気でいるか心配している。

2 亮くんが引っこした先で友達をつくり、好ききらいせず食べているか心配している。

十二 長崎さんは、夫を亡くした上、むすこや孫も自分からはなれていったため、一人でさびしい思いをしていた。亮くんはそんな自分をたよってくれ、さびしさをいやしてくれる子供だった。また、彼が拾ってきたガメラのおかげで家に子供たちが集まり、にぎやかになったので、生きる張り合いを与えてくれる子供でもあった。

## 解説

二 投稿ハガキとは、〈近所のプチ事件〉というコーナーあてに届いたハガキのことです（3〜7行め）。この投稿ハガキをもとに「私」は、「おばあさんとカミツキガメ。／その悪戦苦闘を援護する近所の子供たち」（11・12行め）という構図をうかべ、「ユーモア（↓おばあさんとカミツキガメという取り合わせ）とぬくもり（↓子供たちがおばあさんを援護するところ）の混在するちよつといひ話」（13行め）という記事のイメージを描いています。なお、傍線部の後（74・75行め）にも、記事のイメージ（「一人のおばあさん一件落着」）が述べられているので参考にしましょう。

三 長崎さんの話の内容をまとめてみます。〈長崎さんがカメを飼うようになった↓大きくなり凶暴になったカミツキガメが手に負えなくなった↓亮くんや近所の子供たちにカメの世話を手伝ってもらうようになって、家がにぎやかになった↓新しい飼い主が見つかった〉これは、二で見たようなイメージからずれるところはありません。なお、後（152〜178行め）に「私」が取材テープを再生して知ることになった、「長崎さんは、カメの世話をするために近所の子どもたちが家に集まってくれるのをうれしく思っていたため、本当はカメを手放したくなかった」というような、イメージから外れる言葉は、ここには並べられていません。

四 傍線①からは、睡眠不足の「私」が取材中に何度か眠気をもよおしていることがわかります。そんな状態では、長崎さんの話を細部までは聞けなかったことでしょう。傍線③と引き続く71〜80行めから、「私」は取材のテープを聞かず、「他愛なくもほほえましい事件」というイメージに沿う形で記事を仕立てていったことが読み取れます。

五 記事がどのようにでき上がったことに自信を持っていたのでしょうか。「私」は、「他愛なくもほほえましい事件に仕立てる手ごたえ」（73行め）を持って記事の原稿を書いています。「かつてないほどスムーズに原稿を書きあげた」（81行め）とあるので、その手ごたえ通りに記事は仕上がったのでしょう。また、「他愛のない内容であるほど不思議と読者に喜ばれた」（9・10行め）という箇所にも注目しましょう。

六 74〜80行めより、「私」は二で見たようなイメージをもとに、「長崎さんは新しい飼い主を探し出して、やっかいなカメの問題を解決し、一安心した」という筋立ての記事を書いたことがわかります（「一件落着」（75行め）や「平和な日常を取りもどした」（80行め）という言葉に注目しましょう）。だから、取材から一年後、長崎さん宅を訪れ、「カメのときもそうだけど、長崎さんく落ちこんで、またやせてしまっただけ」（126行め）という話を「主婦」から聞いたとき、長崎さんが落ちこんだ理由がわからず、混乱しているのです。なお、「――え、ほんと一安心？」（176行め）という長崎さんの言葉から、「カメのもらい手が見つかってほんと一安心されたことでしょう」というようなこ

とを「私」が長崎さんに言ったことが読み取れることにも注意しておきましょう。

七 ー まず、106行めと117～119行めから、長崎さんが亡くなっていた（Ⅱ孤独死していた）ことを知ったことがわかります。また、126行めと139～141行めなどから、亮くんが引っこしてから長崎さんが落ちこみ、亮くんが引っこした先の学校でうまくやっているか、気にかけていたことを知ったことがわかります。

2 123・124行めから、亮くんが学校でいじめにあっていたらしいことを知ったことがわかります。また、139～141行めから、亮くんがカメがいたあいだだけは、長崎さんの家で他の子供たちと仲良くやっていたことを知ったことがわかります。

八 二や三で見たように、「私」は、「長崎さんが凶暴なカミツキカメと奮闘する。しかし、子供たちに助けられながら新しい飼い主を探し出し、問題を解決する」というイメージで記事を作ろうと考えて取材に臨みました。だから、その筋立て（Ⅱ「本筋」（32行め）から外れることは「脱線」（31行め・34行め）として注意を払いませんでした。ところが、152～158行めからは、「食が細く、好ききらいも多くて心配していた亮くんがよく食べるようになって長崎さんが驚いている（安心している）」ことが読み取れます。また、164・165行めには、亮くんがどういう気持ちでガメラを拾ってきたのが述べられており、さらに、166～171行めからは、さびしい思いをしていた長崎さんが、亮くんをはじめとする子供たちのおかげで楽しい時間を過ごすことができてよかったと思っていたことがわかります。このように、実は、152～178行めには、記事にされることがなかった、長崎さんや亮くんの心情（気持ち）（Ⅱ「カメの話」の中でとても大事なこと）を読み取ることができる言葉が並べられているのです。

九 まず、傍線⑦より、亮くんにはガメラが「ひとりぼっち」に見えていたので「さびしそうに見え」たのだと想像できます。139～141行めから、亮くんは内弁慶（Ⅱ学校では弱気）で、友達をうまく作れない子供だったことがわかります。亮くんは「ひとりぼっち」という点が共通しているガメラに自らの姿を重ね、かわいそうで「放っておけなかった」のでしょう。

十 22・23行めと166～168行めから、長崎さんが、一人むすこと孫が自分のもとを離れ一人ぼっちでいることをさびしく思っていることを読み取りましょう。そんな中、カメが長崎さんの家に来たことで、亮くんだけでなく、他の子供たちもカメの世話を手伝うために長崎さんの家に集まり、笑い声がいつも家の中にひびくようになりました。また、学校ではうまくいかなかった亮くんにも友達ができて、笑顔が増えていきました。長崎さんは、そのようにして家の中にぎやかになったことを、夢のように楽しいことだと感じたことでしょう。つまり、「カメが私を竜宮城に連れて行ってくれた」という表現は、「カメのおかげで私は楽しく満ち足りた時間を過ごすことができた」ということを表しているのです。

十一 ー 80行めから、「私」は78行めの長崎さんの言葉を、「長崎さんの中に残るガメラへの愛情」を表す、記事の結びの言葉にしようとしていたことがわかります。したがって、「私」は、長崎さんが「元氣かしら」と「あの子（Ⅱガメラ）」を心配していると理解していたのです。

2 「よく食べるカメ」（152行め）、「亮くんは」もともと食の細い子で、好ききらいも多くて、心配してた」（155・156行め）とあることから、長崎さんが、新しいところ（引っこした先）でもちゃんと食べているかどうか心配しているのは、ガメラではなく、亮くんです。となりに住んでいた主婦の「長崎さん、最後まで亮くんのことを気にかけていたわ。鹿児島では友達ができたのかしらって」（139行め）という言葉もふまえると、「あの子、元氣かしら」という言葉は、長崎さんが、亮くんが鹿児島で友達をつくり、うまくやっているか心配する気持ちから出たものだと思像できます。

十二 まず、「六年前に主人を亡くしてはりきってそうじをしたんですよ」（22・23行め）、「——亮くん、うちの孫じゃないけれど」（166～168行め）から、長崎さんは、夫に先立たれ、むすこと孫も自分の元から離れて行ってしまったことをさびしく思っていることを、そして、自分のことをたよってくる亮くんは、そのさびしさ・孤独感をいやしてくれる存在だったことを読み取りましょう。また、亮くんが拾ってきたカメのおかげで、長崎さんの家に近所の子供たちが集まり、「子供たちの笑い声がいつも家の中にひび」（169行め）くようになりました。そういう時間を長崎さんは、「なんだか夢のようだった」（169行め）、「いい夢を見させてもらいました」（171行め）と楽しい時間だったとらえていることにも注意しましょう。これは十でも見た通りですね。つまり、亮くんは、長崎さんに、生きがい、生きる張り合いを与えてくれる存在でもあったのです。